プログラム

※携帯電話の電源は必ずお切りください。
※演奏中の写真・ビデオ撮影はご遠慮ください。

フランツ・ペーター・シューベルト
Franz Peter Schubert
交響曲第７番 ロ短調 D. 759「未完成」
Symphonie Nr.7 H-moll D. 759 "Die Unvollendete"

第１楽章　Allegro moderato
第２楽章　Andante con moto

＊＊＊　休憩（15分）＊＊＊

フランツ・ペーター・シューベルト
Franz Peter Schubert
交響曲第８番 ハ長調 D. 944「グレート」
Symphonie Nr.8 C-dur D. 944 "Die große C-Dur"

第１楽章　Andante - Allegro ma non troppo
第２楽章　Andante con moto
第３楽章　Allegro vivace
第４楽章　Allegro vivace

■ 管 弦 楽：アンサンブル・フロイント
■ 指　　揮：小 西　収

小 西　収（こにし　しゅう）

1965年生まれ。高等学校数学科教員。1987、88年に大阪市立大学交響楽団学生指揮者としてシベリウス第2、ブラームス第2・第4、チャイコフスキー第5の4交響曲を演奏。

音楽に関しては高校時代より独学の道を歩んできたが、最近、小林研一郎指揮法セミナーに3回参加。2002年（女満別）の関連コンサートでは、受講生たちが『運命』冒頭しばらくを指揮するコーナーにおいて「爪を隠し」無理をして普段の自分と正反対の正統的解釈（運命動機をスタッカートで強奏など）で指揮、炎のコバケンに「（3つめの）フェルマータ直前の切迫感はすばらしい」と誉められ、また「そこだともう遅い」と叱られる。「出て来方、歩き方からもっと堂々と、例えば後ろ歩きなど練習するとよい」と言われ、出番交替時に舞台から後ろ歩きで引っ込み、地元聴衆の笑いをとる。

2003年（愛知県知立市）には、マエストロ小林に「朝比奈隆みたいな遅いテンポはもう古い」「朝比奈先生、の師匠…そう、近衛秀麿に似ている」と言われ、また最終日の朝食場ではすれ違いざまに「やあ、きみはフルトヴェングラーみいたいだったなあ」と愉快そうに言葉をかけられた。後日、近衛指揮のCD・DVDを視聴して、近衛と自分の共通性および小林先生のその指摘の鋭さの両方に驚くことになる。時代がかった指揮に呆れられ？ながらも、先生ご自身の大先輩となる巨匠たちになぞらえてもらえたことには大いに気をよくする。

2007年6月、奈良県の橿原交響楽団の客演指揮者に迎えられ、ファミリーコンサートで「木星」「モルダウ」ほかを演奏。

曲目解説

フランツ・ペーター・シューベルト
交響曲ロ短調 D. 759（第７番「未完成」）

不思議な曲である。もしこの曲が通常の４楽章の交響曲として完成していたら、実時間では「ザ・グレート」に及ばないものの、内容の深さではそれに迫るかそれを超えるかという一大作品になり、しかもそれはひょっとすると、“シューベルトの幻想交響曲”とでも呼ばれるにふさわしい、途方もなくラディカルなものになったのではないかという想像が私の頭の中を巡る。アンサンブル・フロイントでの毎週のこの曲の試演の後、疲れ果てて座り込みしばらく立ち上がる気力を失う、ということが私には幾度かあったからだ。それほどこの曲は、人間の精神の深部・暗部に入り込み、その（少なくとも演奏する者の）精気を吸い取るのである。両楽章とも、それぞれ3種類の旋律を順番に歌っていくだけといえばいえる、あきれるほど単純な作りであるはずなのに……。

■ 第1楽章
低弦による短い序奏の後、ヴァイオリンのさざ波に導かれ、Ob.とCl.の重なった第1主題が現れる。そして、束の間の夢にまどろむような長調による第2主題。これを中断して、第1主題の「属音→主音」の動機が、転調されて突如強奏で再現され、それをきっかけとして、ソナタの提示部の中に、第2主題後半の動機を素材とした小展開部のような部分が続く。この直前の小展開による予告編に呼応するかのように、ソナタ展開部では、本編の音のドラマが序奏主題の動機を折り重ねつつ繰り広げられる。

■ 第2楽章
第1楽章第2主題の世界を、そこではそうでなかった明るい高音域で想い出を美化するように長くふり返るような第1主題がまず聞かれる。特に管と弦とが相互にオブリガートを成す副主題部分は、全曲中最も救いのある、喜びに満ちた響きを持つ。続く第2主題は、第1楽章でユニゾンとなっていたOb.とCl.が別々に1度ずつ独奏する。3度音程を階段状に4つ重ねるだけの前半部分を受けて、後半は、1度めは漂うような転調の妙味、2度めは付点音符の軽やかなリズムを対比させる。単純かと思うと「おや」という展開が続き、耳に残って離れない…。そしてその直後には再び悲劇的な強奏が待っている…。まさに一人シューベルトだけが書き残し得た、魅力的な“歌の絵”の世界といえよう。

フランツ・ペーター・シューベルト
交響曲ハ長調 D. 944（第８番「ザ・グレート」）

■ 第1楽章
長大な序奏や力強い主部第1主題の提示など、ベートーヴェンに匹敵する交響楽を書かんとするシューベルトの筆が冴える。そして、それらを受けて、木管による主部第2主題やトロンボーンが序奏動機を吹く経過部分など、鳥のさえずりを聞きながら山道を探索するような音楽が続き、シューベルトの「さすらう若人の歌」といった趣きが漂う。

■ 第2楽章
吟遊詩人の思索的な長旅。これが確かになかなか長い旅で、聴き手にとったら他の楽章より入りづらいかもしれないが、じっくりと付き合ううちにその懐の深い魅力が滲み出るように伝わるだろうことを願っている。

■ 第3楽章
躍動するスケルツォは“高貴なる精神の戯け”。それを受けるトリオの歌は、シューベルトならではの転調の美しさによって、明朗ながらも日が差し日が陰る微妙なニュアンスを併せ持つ。

■ 第4楽章
全曲中、最も粗野で素朴な音楽の喜びに溢れている。先へ進むと、いつもの転調の魔術もやはり聞かれる。特に再現部は、何と変ホ長調で始まり、いったんト短調に収束、その後も1フレーズ毎に違う調を彷徨う。そして終結部に至ると、音楽は単純素朴な素顔を取り戻しつつ、野性的といってもよいほどの高揚を聴かせる。

〈小西 収〉

期待を裏切られることを期待できる演奏会

アンサンブル・フロイント・マネージャー
大 石　聡

小西収／フロイントが、今度はシューベルトを公開演奏にかけるという。私は（自覚的には）この世でもっとも熱心なフロイント音楽の愛好者なのであるが、その私にとって「小西／フロイントのシューベルト」というのは、ある種の「特別な期待」を抱かせずにはおかないプログラムである。

私はフロイントというオーケストラの創設に関わったメンバーの一人であり、その経歴の初期から「小西収の指揮のもとで演奏する」という経験に恵まれたオーボエ奏者でもあった。私にとって小西収は、クラシック音楽の魅力に開眼するきっかけをくれた人である。だから、私にとって小西収は「単なるすぐれた一人の指揮者」ではない。私は小西収という指揮者の素晴らしさについて、冷静かつ客観的に述べる、というようなことが構造的にできない立場にある。だから、それについては述べまい。フロイントというのは、とにかく機会さえ（譜面さえ）あれば、あらゆる曲を演奏してみたい、という意欲の旺盛な（節操がない、ともいうが）オーケストラであったものだから、おかげで私は、小西収と数多くの名曲を奏する機会に恵まれた。その長い経験の中で、小西収の才能によってはじめてその曲の魅力に触れた、というようなことならば幾度もあったことだった。しかし、指揮者の工夫が曲想と完全に「一体」となってしまい、どこまでが作品の魅力か、どこからが演奏の魅力か、もう全然見分けがつかない。これはいわば『指揮者と作品の類い希なる相性の良さ』というより他ない、というほどの曲となると、そうそうあるものではない。そして私の見るところ、その「類い希なる一曲」というのが、実はシューベルトの5番交響曲だったのである。

シューベルトの5番交響曲の第一楽章は、若々しくもチャーミングな明るい曲想の音楽である。勢いよく演奏すると、その瑞々しい若さが心地良くはあるが、ごく単純な「深みのない音楽」のようでもある、と私はずっと思っていたのであった。しかし、小西収の指揮でフロイントがこの音楽を演奏した時、私はまことに「目が眩む」感覚を味わった。微妙に転調しながら繰り返されるメロディを演奏するたびに、曲そのものがふわりと「色彩」を変える。同じ旋律の繰り返しのようでいて、その実、それは「繰り返し」ではない。曲想は転調のたびに「揺らぎ」、そして次第に「屈折」して、光が散乱するように姿を変えてゆく。旋律は明滅をくりかえし、捉えどころのないまま、まぶしい光の中に消えていってしまう。その儚くも淡い感覚が、何ともいえず素晴らしかった。その流れに身を委ねながら、私はその時「シューベルトを演奏するというのは、こんなにも幸せなことなのか」と驚愕したのだった。

私の感じたシューベルトの音楽の魅力とは何だったろうか。私のこの個人的感覚を言葉にするきっかけをくれたのは、カナダの名ピアニスト、グレン・グールドだった。彼が残した映像記録に「オン・ザ・レコード／オフ・ザ・レコード」という有名なものがあるが、その中で、グールドが友人の作曲家と自宅でくつろいだ会話をするシーンがある。その友人が「パデレフスキの音楽というのは、どこか内気なところがあるような気がしないかい？」と話題を振ったのに対して、グールドはうつむいて首を横に振り、やおらピアノに向かって「内気というのは、こういう音楽のことさ」と曲を弾きはじめるのである。その曲こそが、シューベルトの5番交響曲の冒頭部分であった。それを聴きながら、私は「そうか！」と思ったのだった。「内気」な音楽。まさに、ピッタリの表現ではないか。

シューベルトの音楽というのは、非常にシンプルな作りになっている。旋律とその伴奏がただ並行しているばかりで、スコアを眺めているとなんだかスカスカしてくる感じですらある。しかし、一旦演奏が開始されると、そうした音楽の見かけの立体構造とは「全然関係のないところ」に、シューベルトの託した音楽の魅力が立ち上りはじめる。それは無理に言葉で表現するならば、「揺らぎ」や「屈折」というようなものではないだろうか。穏やかでシンプルな旋律が何の衒いもなく呈示され、一節が終わる。その一瞬、微妙極まりない転調が加えられて、もう一度そっくりの旋律が開始される。耳に残存している前のフレーズと、現在進行中の新しいフレーズの間には、微かな「落差」がある。そして、それが「揺らぎ」として感知されるのである。視覚的に表現するならば、美しく描き出された（しかし平凡な）自然の情景が、一瞬「陽炎」の中に揺らぎ、現実感が希薄になる様な感じ、とでも云えばよいだろうか。そのようにして、平凡極まりない世界は、少しずつ夢幻境へと変貌をはじめる。

そのようなシューベルトの「揺らぎ」や「屈折」という魅力が、恐ろしいほど研ぎ澄まされた形で結晶しているのが「未完成」と呼ばれる、二楽章のみの断片的な交響曲なのだろうと、私には思われる。「運命・未完成」といえば、クラシック初心者向けのポピュラーな名曲プログラム、ということになっているが、それは「未完成」の美しい旋律を聴きながらつい居眠りし、「運命」のけたたましさに目を覚まされる、というおきまりのコースのことでもある。このシューベルトの「断章」作品は、普通に演奏してしまえば「退屈極まりない曲」なのである。これほど「名演奏」に出会うことが稀な曲というのは、ちょっと他には考えられないくらいだ。上手いオーケストラ、合奏精度の高いオーケストラほど、この曲の「罠」にはまってしまう。「くっきり」とした「解像度の高い」演奏ほど、この曲の本質を損なう演奏はないからである。隅々まで見渡しきってしまうと、この曲は何の変哲もない、初心者向けの平凡なエチュードのようなものに堕してしまう。そうではなく、この曲は「平凡に」開始され、次第に目眩がするような転調の中で、現実感が希薄になり、最後に「闇」とも「輝き」ともつかないものの中に、曲そのものが吸い込まれて消えてしまうように奏されて、はじめて「この世ならぬ名曲」に変貌するような気がするのである。

「グレート」と称される長大な交響曲は、シューベルトの作品の中では特異な位置を占めている。そこでは「揺らぎ」といった曖昧さや、内気な「屈折」は、影をひそめてしまっていて、もう見あたらない。曲は淡々と、しかし次第に昂揚しながら、どこまでも果てしなく続いてゆくだけだ。シューベルトの作品の特徴である、あの「ああ、このままこの曲は、どこへ行って（消えて）しまうのだろう」という独特の儚い感覚は、この曲にはない。しかし私が思うに、やはりこの大曲にも、少し「変形された形」で彼の個性がやはり刻印されているのではないだろうか。それはつまり「ああ、この曲は、どこまで拡がっていってしまうのだろう」という、感覚である。宇宙的な果てしなさへの恐れ、とでも云えば良いだろうか。「途方もない」という言葉のもつ感覚が、これほど見事に実態化している例を、私はこの曲の他に知らない（ああ、ブルックナーの交響曲には少し似た感じがあるかもしれない）。

みかけはシンプルで素朴だが、その内面は屈折して見通しがきかず、果てしなく深い。私にとってのシューベルトはそういう意味で「内気」というキーワードでイメージされる音楽である。しかし、それはもちろん、私の個人的な経験に基づいた、シューベルトの音楽の或る一面に過ぎない。私は、みなさんにシューベルトの音楽について「先入観」を抱いて欲しいわけではないし、私のイメージに同意して欲しいわけでもない。ただ、私がどのように、今日のこの小西収／フロイントのシューベルトを愉しみに待っているのか、ということについて申し上げたかっただけである。私は、本当にフロイントのシューベルトを聞くことが愉しみでならないのである。

小西収／フロイントは、いつも「生きた音楽」を奏してくれる。それは「上手な演奏」や「立派な演奏」とは違うかもしれない。ある種の型に沿って「上手い」だとか「立派だ」とかいう評価を受けるために、彼らは演奏していないからである。生の演奏を聴くということは本来、音楽が生成するその場に（聴衆という音楽生成に欠かせない要素の一つとして）参加する、ということである。だから、音楽会は決して「発表会」などではない。それは、日頃の練習の成果を「発揮」したり、それを「評価」したりする場では本来ないのである。にもかかわらず、そのような「品評会的音楽会」が如何に多いことだろうか。そのような音楽は、ただその場で奏されている、というだけなのであって、決して「生演奏」などではない。なぜなら、そこで音楽は生成していないからだ。観衆が居てようが居ていまいが、ただ「練習通り」に完璧を目指して奏される音楽は、既にある意味自己完結した、「死んだ音楽」である。そのようなものから、新たなシューベルトを見出すことはありえない。だから私は、実は小西収／フロイントが「期待通り」の演奏をしてくれることを期待しているのではない。彼らが私の期待を裏切り、全く「思いもよらなかったシューベルト」を聴かせてくれることをこそ、私は望んでいるのである。何かがそこに生まれる瞬間に、聴衆として立ち会うことの幸福と比べれば、期待どおりの立派な演奏に満足することなど、どうでも良い。そして、フロイントはまさに「そういうこと」を起こすために、常に「生きた演奏する」ことを旨としているオーケストラなのである。

嬉しい「期待はずれ」を期待して間違いのない演奏会。それが小西収／フロイントの公開演奏会である。期待に胸を膨らませつつ、開演を待ちたい。